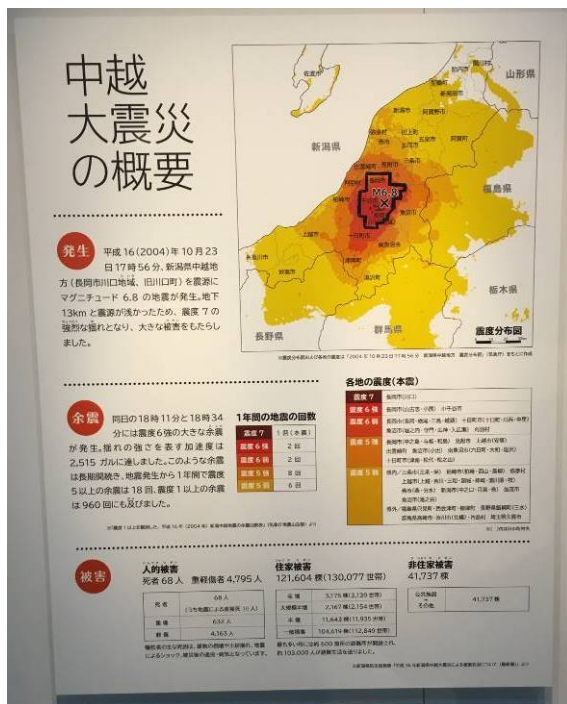


平成 28 年度 公益財団法人庭野平和財団主催  
中越フィールドツアー「地域の創生と人々の力」

平成 28 年 9 月 6 日(火)から 8 日(木)まで、新潟県長岡市の川口地域・山古志地域において GNH(= Gross National Happiness, 国民総幸福)や地域再生に関心のある 12 名の参加者と共に、「地域の創生と人々の力」と題した GNH 現地学習ツアーが行われた。

【9月6日】

長岡駅に集合した参加者一行は、今回のコーディネーターである阿部巧氏(公益社団法人中越防災安全推進機構、ムラビト・デザインセンター長)の案内で、長岡震災アーカイブセンター「きおくみらい」を訪れ、オリエンテーションを受け、現地学習ツアーが始まった。同防災安全機構の山崎麻里子氏(地域防災力センター マネージャー)の説明を受け、12年前に発生した中越地震の被害や対応等の全体像を確認した。



施設の床全面が震災当時の航空写真



端末をかざすと当時の詳細な説明が表示される

平成 28 年度 公益財団法人庭野平和財団主催  
中越フィールドツアー「地域の創生と人々の力」

「きおくみらい」VTR より

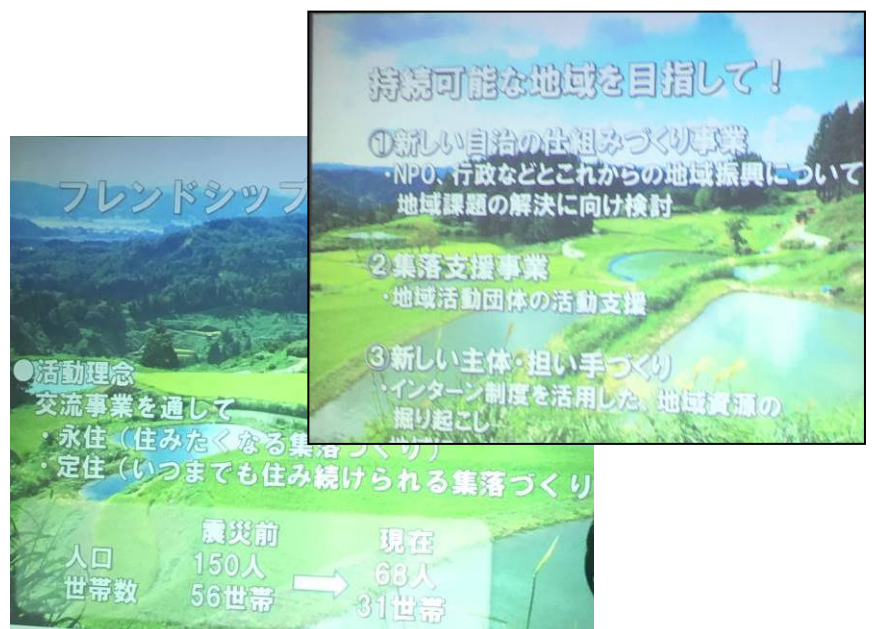
「皆で手をつなぎ一夜を明かした。つながりあい、助け合い、寸断された生活道路を村の男たちが自らの手で修復しようとした。支援到着の 3 日間(72 時間)は自分の手で自分を守る。山古志は、自治会長の判断で全村避難。仮設にバラバラで入るのではなく、集落毎に引っ越すことで、劇的な環境変化の中での孤立をなくす。先の阪神淡路の教訓から学び実践したこと。仮設住宅の談話室で、行政主体でない地域の復興の話し合いを住民同士が何百回も行った。人と人の絆の大切さが改めて確認され、以後の地域再生に取り入れるという、非常に前向きな話し合いになった。文化を守ることは、地域を守ること。1 人では生きていけないが、人とつながることで苦難や困難を乗り越えていける。人の死、傷ついた自然も受け入れて生きていく。」\* 震災の記憶を来場者に伝えるよう、視聴覚や IT 技術などを駆使する取り組みが随所にみられた。

次の目的地への移動中、当財団の高谷専務理事より本ツアーに関する趣旨説明が行われた。その中で「12 年前の震災から、『人々がどのようにつながりを再生し、復興を行ってきたか』という視点で学んでいただきたい」との投げかけがあった。

続いて、川口木沢の「里山ハウス」を訪問。公益財団法人山の暮らし再生機構川口サテライトの春日惇也氏と佐藤瑞穂氏、「にいがたイナカレッジ」インターンシップ生のお二人より川口の中で最も人口減少(震災前 150 人 56 世帯→震災後 68 人 31 世帯)と高齢化が進む、中越地震震源地の集落の復興の歩みについてお話を伺った。



発表中の春日惇也氏



(春日氏談)

「長岡市川口地区(旧川口町)は地震で 10 年分の過疎が一気に進んだと言われている。そんな中、行政では手が届かない過疎地域の交通、高齢者福祉、世代間交流等を担ってきた。現在周辺の約 11 の集落に、20 程の地域維持・地域おこしの団体が設立されている。団体が互いの持ち味を活かすためのコーディネートも再生機構で行っている。若い人を地域外から呼び込んで山の暮らしを体験してもらい、定住に繋がればと考えている。」



平成 28 年度 公益財団法人庭野平和財団主催  
中越フィールドツアー「地域の創生と人々の力」



インターンシップ生を紹介する佐藤氏



左からインターンシップ生の井上さん、タイさん

インターンシップ生である井上さんは明治大学農学部在籍、農村経済を専攻。夏季休暇を利用してインターンに参加。

同じくタイさんは筑波大学に留学、版画専攻。「芸術で人と人をつなぎたい」との目標で参加。

(インターンシップ生談)

「私たちがしていることは、ここで暮らしているだけ。暮らすことを通して、外の人と集落の人との関係を作りたい。木沢と東京の違いは、安心できるエリアの多さ。集落の人との関係性ありき、といっても良い。ここにはコンビニなど便利さはないが、モノよりも関係性や精神性がつまっており、そうしたものを後世にも残していきたい。」



QRコードを読み込むと木沢の音が聴こえる→



インターンシップ生である彼女たちには、上記の目標を達成するため、1ヶ月の木沢滞在中に 100 個の製品開発を行うというミッションを与えられている。アイデア出しは終了し、企画書作成の段階(このさいころ型の紙が 1 つの企画書)で、いくつかは製品化目前まで来ている。

山の診療所  
企画書→



平成 28 年度 公益財団法人庭野平和財団主催  
中越フィールドツアー「地域の創生と人々の力」

【9 月 7 日】

2 日目は、山古志地区<sup>しんおう</sup>の震央メモリアルパーク視察から始まった。

ここでは今でも時折、中高生向けアクティビティを行ったりしている。実際の震央は田圃の真ん中だが、農作業の妨げとなるため、震央を見下ろせる丘の上にシンボルが建てられている。



写真左下の田圃が震央



地元の小・中学生のメッセージ



\*「中越メモリアル回廊」は、初日に訪れた「長岡震災アーカイブセンターきおくみらい」や「山古志復興交流館おらたる」など、7カ所の資料館やメモリアルパークで構成されている。「立派な施設を1カ所に建設するのではなく、被災地域に複数の施設を建てる」というのも住民たちの度重なる話し合いによって決まったという。

震央メモリアルパーク視察後、「山古志復興交流館おらたる」(地元の言葉で「私たちの場所」)を訪問。山古志の暮らしの紹介と復興の歩みについて、地元で生まれ育ち、中学生の時に被災した男性が案内役を務め「自分たちが経験したことを多くの人たちにお伝えしたい」と語った。





平成 28 年度 公益財団法人庭野平和財団主催  
中越フィールドツアー「地域の創生と人々の力」

おらたる見学後、齋藤隆氏（元山古志村役場職員、元長岡市山古志支所長）の案内で村内を回り、被災直後の状況やその後の取り組みについて学んだ。訪問場所は、土砂ダムによって水没した木籠集落、高台へ移転した檜ノ木・池谷集落など。



地震による山崩れ跡には、今も木が生えていない



説明する齋藤氏



水没した集落の家屋



現在は国の所有のため、取り壊しや建て替えはできない。



地元女性たちが出資して立ち上げた食堂  
「山古志ごつつお！多菜田」にて、地元食  
材の神楽南蛮を使用した料理を頂戴した。



震災から 6 年後の平成 22 年に開設した  
「郷見庵」(運営:山古志木籠ふるさと会)。  
麦茶や西瓜を振る舞っていただいた。



平成 28 年度 公益財団法人庭野平和財団主催  
中越フィールドツアー「地域の創生と人々の力」

その後、宿泊先となる小千谷市<sup>わか</sup>若<sup>とち</sup>栃集落の「古民家民宿おっこの木」へ移動。

細金剛氏（わかとち未来会議代表）より中越地震からの復興、特に農業所得の向上、担い手づくりに取り組んできた集落のこれまでと、これからの村づくりについてお話を伺った。



「村民にとっての分岐点は、長期にわたる NHK の取材。これにより村外の人を受け入れの素地ができ、翌年の早稲田大学や NPO 法人ふるさと回帰支援センター連続講座の大学生の受け入れに繋がった」という。今後実施していきたい事業として、若栃学校農業塾や蔵を利用したバーの開店などの構想も伺った。



古民家民宿「おっこの木」リーフレット

その後、フィールドツアー初となる「内部ミーティング」を実施。短時間だが、このフィールドツアーで感じたことを1人ひとりが発表し、分かち合った。



（以下、参加者の声）

- ・災害があったからこそ、立ち上がり、つながりを意識したのだと感じた。
- ・木沢集落の日本らしさ。齋藤さんの「いざ、という時にどうするか？」との言葉が胸に残った。

平成 28 年度 公益財団法人庭野平和財団主催  
中越フィールドツアー「地域の創生と人々の力」

- ・ 都会ではしがらみのような人間関係が多いが、ここで学んだつながりを構築したい。
- ・ 自分たちの手で復興してきた強さ。過疎かも知れないが、地域のすばらしさを感じた。
- ・ 最初は「何もない」と思ったが、都会暮らしに慣れて、目に見える施設なかりを気にして目に見えない人の思いには気づかなかった。ないものを見つけ、作るのではなく、あるものを見つけていく大切さを学んだ。山古志の良さを見つけて周囲の人に伝えることが課題。
- ・ 資料館を見学して、地震が他人事だったと気づいた。日頃の備えが大切。  
道路の修復も、元々の絆の深さがあり、成し得たこと。スーパーやコンビニがなくても不満でないのは、やはり私たちと幸福の尺度が違うのだと感じた。

最後に座長の高谷専務理事より以下のコメントがあった。

「初日、皆さんに『どのようにつながりを再生し、復興を行ってきたか』との視点で参加していただきたいとお伝えしました。しかし、私が感じたのはこの地域は人々の繋がりが元々強く、震災で顕在化し、自覚的になり、震災後にさらに発揮された。外的な要因、日常の外からの影響により、元々強かったものを発見することに繋がったのではないかな。

田舎では余所者に対する通過儀礼があるようだが、それを過ぎれば非常に仲良くなれる。家の作り方や人間関係からしても、都会は閉じていて、田舎はオープン。どちらが良いか、ではなく、互いの良いところを探すことが重要なのではないのでしょうか。」

夜は、再び細金さんを囲み、地野菜をふんだんに使った料理を肴に、遅くまで賑やかな時間を過ごした。



えんじの T シャツが細金さん



私たちを受け入れて  
下さったおっこの  
木の皆さん

ご馳走





平成 28 年度 公益財団法人庭野平和財団主催  
中越フィールドツアー「地域の創生と人々の力」

【9 月 8 日(木)】

最終日は、「おぢや震災ミ

ュージウム そなえ館」を視察。

案内して下さったのは松本勝男氏(そなえ館次長・  
防災士)。3 日間の締め括りに相応しく、阪神淡路大  
震災や中越地震に学び、「これからのそなえ」をどの  
ようにしていくか」との説明に、一同聴き入った。



避難所に予定していた体育館の約半数が強度や安全  
面で使用できず、また避難者数も想定の 3 倍近くであ  
った。ある集落では農業用のグリーンハウスに避難し  
た。ここでの課題は、仕切りがない中で何世帯もが住  
むため、いびきに悩まされる人が続出した。

手前のポリタンク等は実物だが、奥は震災当時の写真

避難所の写真前で説明する松本氏

「ここでの課題の 1 つに、出入り口の近くを  
若い家族が占拠し、高齢者は奥に追いやられ  
たため、トイレを我慢し過ぎて体調不良を訴  
えるお年寄りが出てしまった」という。

そなえ館視察を以て、3 日間の行程を終了し、一行は長岡駅にて解散した。

所感；今回視察した「中越メモリアル回廊」は、中越地震の際、支援してくれた人々への恩返しとして、住人同士  
が何十回と語り合う過程を経て作り上げられたものだという。「つながりをいかに再生してきたか」との視点で各  
地を回り、話しに耳を傾けてきたものの、答えは見つからず、今後も探し続けるしかないと感じた。しかし、この  
地で積み上げられてきた「対話」が 1 つのヒントとして挙げられるのではないかと。元々地域のつながりが強いも  
の、家族を失った方、家を失った方、特に被害を受けなかった方など、被災状況は一律ではない。皆が同じ方向  
を向いている場面ばかりでなく、時にぶつかったりしながらも、再び同じテーブルにつく。近代化に伴う都市化、  
工業化への流れの中で、効率性重視、利害中心の機能体組織にあっては非効率と切り捨ててきたこの過程を、中山  
間の共同体組織では取り入れ、実践した。人と人がつながり合う風習や伝統が、いくつかの地方や農村には未だ  
残っている、その一端を垣間見る 3 日間となった。